

小規模校・複式学級の体育授業における子どもの特性

－子ども間のコミュニケーションに着目して－

古田祥子（和歌山大学大学院）

1. 目的

本研究の目的は、小規模校・複式学級の体育授業において、人間関係が固定化された中で行われる子ども間のコミュニケーションをもとに、小規模校・複式学級の体育授業における子どもの特性を明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 時期及び対象者

- ・事例研究（表1）

表1. 調査対象及び時期

	事例①	事例②
時期	2018/9/11~10/18	2019/9/5~10/3
対象	T小学校2・3学年	K小学校5・6年生
単元	鉄棒	バレーボール

- ・インタビュー調査

対象：小規模校・複式学級に勤務または担任する教師11名

時期：2020年6月～11月

2) 分析方法

- ・事例研究：木下(2007)のM-GTAの分析手順を参考に分析を行った。
- ・インタビュー調査：NVivo12 proを用いて分析を行った。

3. 結果と考察

事例では、「否定的な言葉の少なさ」、「無言の配慮」といった特徴が確認できた。この否定的な言葉の少なさは、互いの技能や特性の理解によるといえる。また、児童らは否定されないことで、安心感を持ち自己解放がなされている。さらに、事例において「無言の配慮」が見られた。この配慮後、配慮を受けた児童に活動の変化が生まれ、意欲向上や連係プレーの挑戦へとつながった。この配慮は、相互理解の深さによると推察できる。さ

らにこの配慮から、自分一人での活動ではなく協働を重視しているとも推察できる。

インタビューでは、子どもの寛容さや相互理解の深さについて複数の教師が述べていた。これらは事例で見られた否定的な言葉の少なさにつながると推察できる。さらに教師は、阿吽の呼吸、暗黙のルールなど言葉にしない子どものやり取りについて述べていた。これらの見えないコミュニケーションは事例の無言の配慮につながるといえる。

この否定的な言葉の少なさと見えないコミュニケーションから、「安心感」と「仲間との活動の優先」が示唆された。

4. 結論

結果から、「安心感」と「仲間との活動の優先」が示唆された。これらの特徴は、否定的な言葉の少なさや無言の配慮から生まれるものと考えられる。さらにこの「安心感」と「仲間との活動の優先」の相互作用により、差を包括し、だれもが夢中になって楽しめる体育を実施できる環境を生み出しているといえる（図1）。

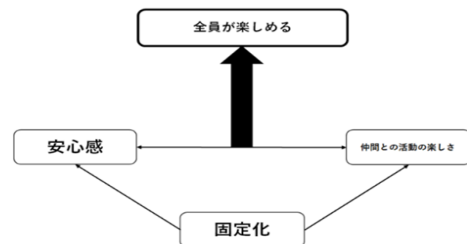


図1. 小規模校・複式学級の体育授業の特性

5. 主な引用参考文献

木下康仁(2007)ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて, 弘文堂.

梅澤秋久・苫野一徳(2020)真正の共生体育をつくる, 大修館書店.